

日本语言史中 『汉字』的研究

——以古今『常用汉字』为中心

(日文版)

于泳 著



上海交通大学出版社
SHANGHAI JIAO TONG UNIVERSITY PRESS

日本语言史中“汉字”的研究

——以古今“常用汉字”为中心

(日文版)

于 泳 著



上海交通大学出版社
SHANGHAI JIAO TONG UNIVERSITY PRESS

内容提要

本书以日本现代“常用汉字表”、古代说话集《今昔物语集》以及《色叶字类抄》为依据,详细探讨了现代“常用汉字”在古代的使用情况。还从史学研究的角度,根据各时代大量资料详细探讨了个体词汇的汉字历史演变过程。本书读者对象为大学日语专业的教师和学生,以及日语爱好者和研究者。

图书在版编目(CIP)数据

日本语言史中“汉字”的研究:以古今“常用汉字”为中心:日文/于泳著. —上海:上海交通大学出版社,2018
ISBN 978-7-313-19503-6

I. ①日… II. ①于… III. ①日语—语言史—研究②日语—汉字—研究 IV. ①H36

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2018)第 118550 号

日本语言史中“汉字”的研究

——以古今“常用汉字”为中心(日文版)

著 者:于 泳

出版发行:上海交通大学出版社

邮政编码:200030

出 版 人:谈 毅

印 制:当纳利(上海)信息技术有限公司

开 本:710 mm×1000 mm 1/16

字 数:190 千字

版 次:2018 年 11 月第 1 版

书 号:ISBN 978-7-313-19503-6/H

定 价:49.00 元

地 址:上海市番禺路 951 号

电 话:021-64071208

经 销:全国新华书店

印 张:12

印 次:2018 年 11 月第 1 次印刷

版权所有 侵权必究

告读者:如发现本书有印装质量问题请与印刷厂质量科联系

联系电话:021-31011198

内蒙古师范大学学术著作出版基金资助

目 次

第1章 序論	1
第2章 漢字の輸入と日本語への受容	5
第1節 はじめに	5
第2節 漢字の輸入	6
第3節 漢字の受容	9
第4節 漢字の広がり	16
第5節 おわりに	18
第3章 漢字における先行研究	20
第1節 はじめに	20
第2節 古代作品に関する研究	22
第3節 近世作品に関する研究	26
第4節 近代以後の作品に関する研究	29
第5節 漢字に関する「論理的な研究」	32
第6節 先行研究の問題点と本書の方法・意義	34
第4章 『今昔物語集』と「常用漢字表」で一致する動詞の表記	37
第1節 『今昔物語集』について	37
第2節 研究の方法と意義	38
第3節 とともに1種の漢字で表記される動詞	40
第4節 とともに2種以上の漢字で表記される動詞	47
第5節 おわりに	53

第5章 『今昔物語集』と「常用漢字表」で一致しない動詞の表記	55
第1節 はじめに	55
第2節 「常用漢字表」に存しない動詞	56
第3節 とともに異なる動詞	68
第4節 おわりに	72
第6章 『今昔物語集』と「常用漢字表」で一部一致する動詞の表記	73
第1節 はじめに	73
第2節 『今昔物語集』使用数1位が「常用漢字表」の漢字表記 と一致する動詞	75
第3節 『今昔物語集』使用数2位以下が「常用漢字表」 の漢字表記と一致する動詞	85
第4節 『今昔物語集』で2種以上が「常用漢字表」 で1種の漢字表記に統一される動詞	91
第5節 『今昔物語集』と「常用漢字表」で一部一致する動詞	102
第6節 おわりに	107
第7章 「アワツ」の漢字表記についての史的研究	109
第1節 はじめに	109
第2節 古辞書における「アワツ」の漢字表記	110
第3節 上代・中古における「アワツ」の漢字表記	111
第4節 中世における「アワツ」の漢字表記	112
第5節 近世における「アワツ」の漢字表記	116
第6節 近代における「アワツ」の漢字表記	122
第7節 おわりに	124
第8章 サ変動詞の漢字表記「仕」「為」について	126
第1節 はじめに	126
第2節 現代におけるサ変動詞の連用形「し」の漢字表記	127
第3節 古代辞書に見られる「為・仕」	130
第4節 中世までの作品における「為」「仕」	133

第5節 中世におけるサ変動詞の漢字表記	135
第6節 おわりに	147
第9章 「ハイル」の漢字表記と意味の変遷	149
第1節 はじめに	149
第2節 上代・中古における「ハイル」の表記と意味	150
第3節 中世における「ハイル」の表記と意味	153
第4節 近世における「ハイル」の表記と意味	156
第5節 現代における「ハイル」の表記と意味	158
第6節 おわりに	164
第10章 本書のまとめ及び今後の課題	165
第1節 本書のまとめ	165
第2節 今後の課題	169
参考文献	170
索引	178
あとがき	182

第1章 序 論

日本の文字について、近世の国語学者の平田篤胤、鶴峯戊申らが神代文字^①という説を提唱したが、早くも斎部広成の『古語拾遺』(807)の序において「蓋聞 上古之世 未有文字 貴賤老少 口口相傳 前言往行 存而不忘」と記載されていることにより、以前の日本には文字がなかったことを示している。国語学者の本居宣長、伴信友らも、神代文字を否定した。特に、伴信友氏は『仮字本末』の付録『神代字弁』において、それを後世の偽作として議論した。同じように、現代の国語学者の山田孝雄も、『所謂神代文字の論』(1953)で、神代文字が後代の偽作であると主張した。また、日本に初めから文字があるならば、早くから日本文の純粋な形が出来ていたはず^②であるなど、現在の日本語学界では、「神代文字」の存在を否定し、日本の文字は漢字が輸入されてから使い始めたとされる。

従って、漢字は日本語の歴史において、重要な意味を持っている。漢字は元々中国で発達してきたものであるが、日本における正式な記録は『古事記』^③(以下『記』と略す)と『日本書紀』^④(以下『紀』と略す)に見始められた。

① 漢字渡来以前に日本で使用されたと称せられる文字。中世の神道家や江戸の国粹主義的国学者が主張した。しかしその例として示されたものは多くハングルを模した偽作であり、その存在は今日では否定されている。(『百科事典マイペディア』による)

② 春日和男「漢字の輸入」、佐藤喜代治編『漢字講座 1 漢字とは』明治書院、1988年。

③ 『古事記』における記録は以下のようである。

又科賜百濟國、若有賢人者貢上。故受命以貢上人名和邇吉師。即論語十卷、千字文一卷并十一卷、付是人即貢進。此和邇吉師者文首等祖。

④ 『日本書紀』における記録は以下のようである。

阿直岐、亦能讀經典、即太子菟道稚郎子師焉。於是天皇問阿直岐曰「如勝汝博士、亦有耶。」對曰「有王仁者、是秀也。」時遣上毛野君祖荒田別・巫別於百濟、仍徵王仁也。其阿直岐者、阿直岐史之始祖也。十六年春二月、王仁來之。則太子菟道稚郎子、師之、習諸典籍於王仁、莫不通達。所謂王仁者、是書首等之始祖也。

記紀の記載によれば、応神天皇の時、王仁が百済から典籍をもたらしした。その後、貴族階級の間にも本格的に漢字、漢文の学習が始まった。

それに対して、中国の史書である『三国志』の「魏書」^①において、「倭王因使上表」があることにより、3世紀ごろの日本において、漢字で書かれた「文書」が既にあったことが推測される。また、出土品における漢字、中日の他の記録における漢字など、種々の資料を調べたところ、漢字の輸入は、記紀の記載より早いことも推測される。従って、漢字はいつ、どのようにして日本に伝わっていったか、いつから日本語と結びついたのか、改めて考察する必要がある。なお、史書・記録のみならず、史書・記録を成立させるまでの出土品に記された文字も考察の資料にする。

時代の推移につれて、大量の漢字の使用は、日本教育の普及を妨害する原因とされ、「漢字御廃止之議」^②、仮名採用論^③など、色々な主張があったが、いずれも実現できなかった。結局、漢字を制限する「漢字節減論」が採用された。これを最初に提唱したのは福沢諭吉^④である。その後、色々と議論された結果、1923年の「常用漢字表」(1 962 字)、1946年の「当用漢字表」(1 850 字)、1981年の「常用漢字表」(1 945 字)、2010年の「常用漢字表」(改訂)(2 136 字)が次々と発表され、漢字が増加する傾向が見られる。

従って、「漢字」の流れを調べることは必要となっている。その研究の一章として、各時代の漢字に関する先行文献を調べ、考察し、どんな研究がされているか、各時代の漢字の特徴は何なのか、を見る必要がある。

前述したように、明治以降、日本語について、色々な議論がされ、漢字の改革も何度か実施されてきたが、「常用漢字」は増加する傾向にある。本書の一章として、『今昔物語集』^⑤を主要調査資料とし、この作品に使用された漢字を考察対象とする。その理由としては、『今昔物語集』が書かれた時代は、

① 「魏書」の「東夷伝」において、以下のような記載がある。

正治元年、太守弓遵遣建中校尉梯鞠等奉詔書印綬詣倭國、拜假倭王、并齎詔賜金、帛、錦罽、刀、鏡、采物、倭王因使上表答謝恩詔。

② 慶応2年(1866)に、前島密により提出され、表音文字の採用を主張した。

③ 特に明治13(1880)年、14(1881)年ごろから、色々な会が成立し、仮名採用論が盛んになった時期があった。

④ 福沢諭吉(1835年1月10日～1901年2月3日)は、蘭学者、著述家、啓蒙思想家、教育者。慶應義塾の創設者であり、専修学校(後の専修大学)、商法講習所(後の一橋大学)、伝染病研究所(現在の東京大学医学研究所)の創設にも尽力した。

⑤ 山田孝雄編『今昔物語集』(日本古典文学大系 22～26)岩波書店、1959～1963年。

平安時代の貴族を中心とする時代から、武士の時代へと移行していく変化の大きい時代である。表記も、平仮名書き中心の和文から、漢文の影響を受け、現代の表記につながり、和漢混淆文が生まれた時代である。また、『今昔物語集』に関する今までの研究により、『今昔物語集』に使用された漢字は、当時の「常用漢字」がかなりの程度で使用されているという指摘^①があった。従って、『今昔物語集』における「常用漢字」は、どのような漢字なのか、千年以上経った当時の「常用漢字」は、現在どれほど残されているか、その特徴何であるか、などを調べることは重要な意味を持っている。

しかし、『今昔物語集』の考察は広範にわたる為、本書では先学のご研究を踏まえつつ、動詞の漢字表記に焦点を絞り、「常用漢字表」(改訂)^②に載っている動詞^③の漢字表記と比較し考察していきたい。勿論、『今昔物語集』と「常用漢字表」とでは、年代が離れているが、『今昔物語集』と「常用漢字表」(改訂)の漢字表記の比較を通して、院政期の常用漢字と現代の常用漢字の違いを知ることができる。

さらに、より詳しく漢字変化の特徴を見出すため、個別研究も考察していく。

「アワツ」^④は、古語であり、現在の学校教育では「慌」と表記され、「常用漢字表」においても「アワツ」の項に「慌」のみ収められている。しかし、『今昔物語集』では、「アワツ」が「遽・澆・急・周・周章」の5種の漢字に当てられているが、「慌」の表記はなかった。①「慌」は「アワツ」の漢字表記として、いつ、どのような資料に使われ始めたのか。②時代によって、「アワツ」はどのように表記されているのか。③どんな理由で「慌」が使用され始めたのか。④表記によって意味が違うのだろうか、などについて明らかにしたい。先行研究を調べたところ、「アハツ」についての研究はまだ触れていないようである。従って、古代から現代までの大量の辞書・作品を中心に、より詳しく調査し、以上の問題を明らかにする。

現代では、よく使用されている語「ス」^⑤が、「する」と表記されるのは一般

① この結論を得たものに、峰岸明(1971)、佐藤武義(1974)などの研究がある。

② 三省堂編修所『新しい国語表記ハンドブック』(第6版)三省堂、2012年。

③ 音訓の動詞も例の動詞も考察する対象とする。ただし、「ス」以外のサ変動詞を除外した。

④ 古文の「アワツ」と現代の「アワテル」ともに、「アワツ」と表記する。

⑤ 古文の「ス」と現代の「スル」ともに、「ス」と表記する。

的であるが、古代では「為」は一般的であった。「ス」の連用形「シ」も、古代では「為」「仕」と表記されたが、現代では「し」は普通である。また、連用形「シ」からなる複合語「シ〜」などの漢字表記も、古代では「為〜」「シ〜」「仕〜」と表記された。しかし、現代では「仕事」「仕方」のように、「仕〜」と固定されている語と、「しわざ」のように、「し〜」と固定されている語のみ残っている。

本書では、サ変動詞「ス」の連用形「シ」、複合語「シ〜」が漢字「仕」と表記され始めた時期、使用された箇所、変化の過程などを対象として考察していく。

さらに、「ハイル」は、「常用漢字表」で「入」と表記され、日常会話だけでなく、文学作品などにもよく用いられる語である。しかし、『今昔物語集』では、「ハイル」の語はなく、「ハヒイル」(這入)はあった。時代が進みその表記には変化が起った。川端康成の『伊豆の踊子』(大正15)^①には、「二度も三度も湯には入つてみたりしてゐた」と「湯に入つて」の2種の表記があり、「は入る」という特別の表記が使用されている。この「は入る」という特別な表記はいつ、どのような資料に使用されていたのか、特別な意味があるのか。「入」が「ハイル」の漢字表記として、いつ、どのような資料に使われ始めたのかなどについて、古代から現代までの文学作品を資料にし、詳しく調査していく。

以上のように、漢字の輸入、漢字についての先行研究から、『今昔物語集』の「常用漢字」と現代の常用漢字との関連、漢字についての個別研究まで、様々な視点から考察していく。

① 川端康成『伊豆の踊子』(新選 名著復刻全集 近代文学館)金星堂、1927年。

第2章 漢字の輸入と日本語への受容

第1節 はじめに

現在の日本語の文章は漢字仮名交じり文で、その中に片仮名や数字、符号を交えて書くのが、基本的なスタイルである。この特殊なスタイルの中で、もともと中国で発達した漢字は、平仮名・片仮名とともに日本語の文字歴史において重要な地位を占めている。文章における漢字の比率も文章の読みやすさを左右する大きな要素である。

日本の文字について、近世の国語学者の平田篤胤^①、鶴峯戊申^②、落合直澄^③らが神代文字という説を提唱した。しかし、平安時代初期の斎部広成^④は、『古語拾遺』(807)の序において、「蓋聞 上古之世 未有文字 貴賤老少 口口相傳 前言往行 存而不忘」と記している。以前の日本には文字がながたことを示している。神代文字の存在説を反対し批判したのは国語学者の本居宣長^⑤、伴信友^⑥らである。特に、伴信友が『仮字本末』の付録「神代字弁」でそれを否定し、後世の偽作として論議をした。現代の国語学者の山田孝雄^⑦も、『所謂神代文字の論』(1953)で、神代文字が後代の偽作であると主張した。また、日本に初めから文字があるならば、早くから日本文の純

① 平田篤胤(ひらた-あつたね、1776～1843年)、国学の四大人の一。江戸後期の国学者。

② 鶴峯戊申(つるみね-しげのぶ、1788～1859年)、江戸末期の国学者。

③ 落合直澄(おちあい-なおずみ、1840～1891年)、国学者。

④ 斎部広成(いんべ-ひろなり、生没年不詳)、平安初期の官人。

⑤ 本居宣長(もとおり-のりなが、1730～1801年)、江戸中期の国学者。

⑥ 伴信友(ばん-のぶとも、1773～1846年)、江戸後期の国学者。近世考証学の泰斗。

⑦ 山田孝雄(やまだ-よしお、1875～1958年)、国語・国文学者。文化勲章。

粹な形が出来ていたはずである^①など、現在の学界では、「神代文字」の存在を否定するのは普通である。

神代文字が存在したか否かについても日本語表記の歴史の一問題であるが、本章では、中日史書のみならず、出土品等も対象とし、漢字が日本へ輸入された過程、日本語に受け入れられた経緯、などに重点を置き、考察していく。

第2節 漢字の輸入

現在では、確認されている最古の漢字とは、古代中国の殷(紀元前16世紀ごろ～紀元前11世紀ごろ)、「亀甲」「獣骨」などに刻まれた甲骨文と言われる文字である。その後の時代には、金文・大篆・小篆・楷書などがある。永元12年(100)頃に後漢の許慎が著した『説文解字』は中国初の字書である。一方、日本における漢字の学習の記録については『古事記』と『日本書紀』からみることができる。本節では、漢字はいつから、どのように日本に伝わっていったか、中日交流の上での漢字の重要性などについて中日資料を参考とし考察していく。

中国の歴史書『史記』(前124)の淮南衡山列伝第58の項に、

遣振男女三千人、資之五穀種百工而行。徐福、得平原広沢、止王不来。

と記されている。この「平原広沢」は日本であると言われている^②。徐福の伝説について、民間の伝説ではないかと見ている人がいるだろうが、『史記』は中国の最古の歴史書であり、多くは司馬遷が現地を訪ね確認したうえで収録したことで、信憑性が高い史書である。その後の『漢書』の「郊祀志」、『三国志』の「呉志」、『後漢書』の「東夷列伝」などの多くの書にも、徐福のことが取り上げられている。

一方、日本では和歌山県の徐福の墓碑、佐賀県の「徐福上陸地」の石碑な

① 春日和男の「漢字の伝来」、佐藤喜代治編『漢字講座1 漢字とは』明治書院、1988年。

② 衛挺生『徐福入日本建国考』商務印書館、1950年。

ど、「徐福」についての伝説が数多く残っている。実際はどこにたどり着き、どこに居住し、どこへ行ったかは分からないが、徐福の伝説となった地は非常に多い。以上から、徐福が日本に行った可能性が極めて高いと考えられる。この伝承が事実であれば、徐福が日本に行った時期は紀元前3世紀であることになる、こうして見ると、紀元前3世紀であるとされる。その頃に、漢字がごく一部の日本人に知られた可能性が出てくる。

漢字の輸入について、有力な記述が漢時代の書物『漢書』にもある。『漢書』の「地理志」には、

樂浪海中有倭人、分爲百餘國、以歲時來獻見云。

と記されているのに対して、『後漢書』の「倭人伝」に、

倭在韓東南大海中、依山島爲居、凡百餘國。自武帝滅朝鮮、使驛通於漢者三十許國、國皆稱王、世世傳統。

と記されている。前漢の武帝が朝鮮を滅ぼし、樂浪郡を設置したのは前108年であることから、小国分立状態であった倭国が樂浪郡を通じて漢へ朝貢したのは紀元前2世紀前後と推定される。それに基づき、倭国は漢へ朝貢した際、漢字で書かれたものを提出した可能性があるとして推測される。

また、2001年10月4日の山陰中央新報によると、1998年島根県田和山遺跡(2世紀前半)で出土した二点の破片は中国が朝鮮半島に設けた樂浪郡のすずりと判明した。当時日本で使用されていたかどうかは疑問であるが、すずりも文字を書くことに必要な物であることから、この頃から漢字が日本に伝わっていったのではないかと推測される。

さらに、岡村秀典氏は、須玖岡本遺跡(福岡県・春日丘陵の先端にある春日市)で出土した鏡(D地点)を分析し、そこに埋葬されていた鏡の内の3面は漢鏡2期(紀元前2世紀)であるのに対して、23面は漢鏡3期(紀元前1世紀)であることから、須玖岡本D地点墓の年代は、およそ前1世紀ごろに位置付けることができようとして指摘している^①。それに基づき、埋葬された鏡

① 岡村秀典著『三角縁神獣鏡の時代』吉川弘文館、1999年。

は、少なくとも紀元前1世紀前に伝わっていったと考えられる。よって、鏡に刻まれた銘文、即ち漢字は日本に伝わっていったのは、紀元前1世紀前後と考えられる。

明治36年に、京都府函石浜遺跡で「貨泉」と書いた古代中国の貨幣が発掘された。その後、長崎県・佐賀県・福岡県などの北九州、山口県・岡山県・愛媛県などの瀬戸内海の港、大阪までの広い地域で、「貨泉」が出土された。「貨泉」は王莽(前45～後23)の治世に鑄造したもので、天鳳1年(14)～建武16年(40)の間に鑄造されたものである。貨泉は鑄造・使用していた期間が短い、広い地域で出土されたことから、当時中国と、九州から近畿地方に渡る地域との間で、貿易が盛んに行われたことが窺える。それと同時に、貨幣に記された中国の漢字も一部の日本人に知られたと推測される。従って、1世紀ごろの日本で貿易に従事していた一部の日本人に漢字が知られ、漢字を読むことができたのではないかと思われる。

その後、『後漢書』における「東夷伝」において、

建武中元二年、倭奴國奉貢朝賀、使人自稱大夫、倭國之極南界也。光武賜以印綬。

と記されている。これに関しては、福岡県の志賀島で出土された「漢委奴国王」という蛇紐印が、『後漢書』に述べられた光武帝から倭奴国王に授かったものとされる説がある。1981年に中国江蘇省の甘泉2号墳で出土した「廣陵王璽」という金印は、58年に光武帝の子に下賜されたものとされている。この印の字体が奴国王の金印と似ていることなどから、同じ工房で製作されたのではないかと推測される。また、古代中国の政治体制から見れば、光武帝から賜った「漢倭奴国王」と共に、「詔書」というものがあつたとされる。「詔書」を読むことのできる人たちは恐らく渡来人である可能性があるが、徐福の伝説、『漢書』と『後漢書』との記載、出土された貨幣・破片などを考えると、漢字が読める日本人もいたのではないかと考えられる。

以上に基づき、漢字と日本語との接触は紀元前3世紀ごろである可能性があるが、『漢書』の「地理志」や『後漢書』の「倭人伝」の記載と、楽浪郡の硯・前漢鏡の出土により、漢字と日本語との接触は少なくとも紀元前1世紀で

あることが明らかになった。その後、新との貿易活動や後漢との頻繁な外交が行われることにつれて、漢字が日本に伝わっていったと推測される。政治・経済の交流とともに、漢字を使う渡来人がいたと思われる一方、一部の日本人にも知られたのではないかと推測される。

第3節 漢字の受容

漢字が日本に伝わっていったとしても、その頃文字がなかった日本人にとって、簡単に漢字の使い方を身につけることはできなかったはずである。古代の日本人はどのように漢字を身につけ、使用するようになったかについて、出土品と、史書に書かれている記載などを基に考察しながら解明していきたい。

1. 出土品における漢字

平成8年、三重県大城遺跡で2世紀前半とされる弥生式土器の高杯が発掘された。その高杯の脚の部分に「奉」或いは「年」「幸」と読める文字が逆さまに刻まれており、今まで発掘された最古の刻書土器とされる。また、同県の片部貝蔵遺跡で2世紀末とされる「田」と書いた墨書土器も確認され、日本最古の墨書土器とされる。3世紀の出土品において、長野県の根塚遺跡で出土した「大」と刻まれた土器と、福岡県前原市の三雲遺跡群で出土した甕の口縁部の近くに「竟」(鏡)と刻まれた土器がある。また、千葉県の市野谷宮尻遺跡で3世紀の「久」と見られる墨書土器も出土された。4世紀の出土品の中に、三重県片部遺跡の「田」と書かれた土器のほか、4世紀初頭とされる木製よろいがある。この木製よろいには、黒い跡が五つ並び、筆で書かれた完全な形で、そのうちの 하나가「田」と判定された。

以上の土器、木製よろいのほかに、弥生時代とされる「山」と刻んだ貝符が、鹿児島県種子島の広田遺跡で見つかった。これはコミュニケーションツールとして刻まれた文字ではなく、呪符・護符として刻まれたのではないかという意見がある^①。「田」という文字が多く出土したことについて、寺沢

① 上田正昭編『古代の日本と渡来の文化』学生社、1997年。

薰氏^①は、中国・殷代の甲骨文字の中にある巫女を意味し、祭祀などに関する記号ではないかと指摘している。また、土器について、村落内で祭祀・儀礼などの行為に伴って使用されたものであるとの指摘もある^②。従って、2世紀から4世紀にかけて、土器などに刻まれたり書かれたりした文字が、祭祀・儀礼などの行為によく用いられたと考えられる。

その一方、前述したように、出土した前漢の鏡や王莽時代の「貨泉」などから、1世紀までの倭国は、古代中国との交流が盛んに行われたことが窺える。そのため、漢字が読める人は渡来人だけでなく、一部の日本人もいたと推測される。土器の「大」の間違った筆順や二文字に見える「竟」^③から、この字は日本人が書いた字ではないかと推測される。この頃から日本人が漢字を真似て文字を書き始めていたと言える。

土器に書かれた漢字だけではなく、鏡に刻まれた漢字も日本語の文字を研究する上でなくてはならない資料である。日本で作られたとされる最古の鏡は、福岡県の平原遺跡で出土した2世紀後半とされる内行花文鏡である。中国に例がない直径46.5 cmのサイズである。柳田康雄は、「陶氏作大宜子孫という中国鏡にない銘文があり、中国鏡と逆位置に配置した文様があるなど、本来の意義を知らずに模倣しているふしもある。(略)、渡来匠人が伊都国で一括して製造したものではないか」と指摘した^④。この内行花文鏡が日本製であれば、2世紀後半の日本では、漢字が既に模倣されていることが窺える。

日本で出土した最も古い年号が入っている中国の鏡は、魏の青龍3年(235)の銘方格規矩四神鏡である。その他に、魏の時代に当たる銘文が書かれたものは景初3年(239)の三角縁神獸鏡、正始元年(240)鏡、景初4年(240)^⑤鏡などがある。また、呉の年号が入った赤烏元年(238)の内行花文鏡と赤烏7年(244)の平縁神獸鏡も出土した。銘文鏡の三角縁神獸鏡をめぐ

① 1995年12月1日中日新聞による。

② 高島英之著『古代出土文字資料の研究』東京堂、2000年。

③ 平川南「2～4世紀の倭国で書かれた文字」、国立歴史民俗博物館編『古代日本文字のある風景—金印から正倉院文書まで—』朝日新聞社、2002年。「先に「入」を書いて後に横画を右から左に引いており、明らかに誤った筆順である」と述べている。

④ 柳田康雄『伊都国を掘る—邪馬台国に至る弥生王墓の考古学』大和書房、2000年。

⑤ 実際に存しなかった年号である。